

お茶の水女子大学ジェンダー研究所

『ジェンダー研究』執筆要項

お茶の水女子大学ジェンダー研究所

2016年7月4日改定

■ 執筆要項

原稿提出にあたって

- 1 CD-R/RW を使用する。
- 2 ラベルに氏名、論文題目、使用機種名およびソフト名を記入する。
- 3 原則としてメール添付ファイルにて送付は不可。

入力にあたって

- 1 本文、要約、注、文献を MS-Word または TXT で読み込める形式で入力する（MS-Word または TXT に変換できない機種を使用している場合は、編集事務局に相談する）。
- 2 図・表を使用する場合は、同一ディスクに別ファイルを作成する。

本文について

- 1 論文には、本文（図表等を含む）ほか、注、文献、表題紙を添付する。
- 2 表題紙には、題名（副題を含む）、著者名、所属を記す。このとき、標題（副題を含む）と著者名を英訳したのも必ず添付すること。
- 3 原稿の書式に関する、基本的な原則は以下のとおり。
 - ① 原稿は A4 版の用紙を使って、40 字×30 行で印字する。
 - ② 文字サイズは 10.5 ポイント以上。
 - ③ 和文の句読点は、「,」「.」を使用せず、必ず「、」「。」を用いる。
 - ④ 和文中に欧文文字や算用数字を用いる場合は、基本的に半角文字を使用する（2002年ではなく2002年）。頭文字による略語も同様。
 - ⑤ 記号使用に関する原則は以下のとおり。

【A】 カッコ記号

『 』	和文の書名や雑誌名には、二重カギカッコをつける。
「 」	和文の論文名には、カギカッコをつける。 また、本文中で短い引用をする場合にも、カギカッコを用いる。その際、引用する文章中に「 」が使われている場合には、そのカッコは『 』にかえる。
< >	ある概念を強調したいとき、< >を用いてもよい。

()	文章中に挿入するかたちで注釈を入れるとき、全角の () を用いる。この代わりに、—— (2倍ダッシュ) を用いてもよい。— (全角ダッシュひとつ) は用いない。ただし、日本語に欧文の原語を注釈書きするときには、() を用いなければならない。
[]	引用に際して、引用文中に補足説明を入れる必要があるとき、全角の [] を用いる。また、聞き取り資料などを提示するさいに、補足説明をする必要がある場合にも用いることができる。
“ ”	引用文以外のひとまとまりの表現を示す場合、“ ” を用いることができる。

【B】 その他の記号

—	長音を示すときには、全角の「ー」を用いる。「ー」(全角ダッシュ) や「—」全角ハイフンを使わないように注意する。
——	2倍ダッシュは、副題の前につける。また、文章中に挿入するかたちで注釈を入れるときに () の代わりに用いることもできる。
—	対応するふたつの用語を結びつけるときに、全角ハイフンを用いる。「差別—被差別」や「普遍—特殊」など。
……	3点リーダふたつは、引用文における省略を示すときや、また、聞き取り資料の不明や余韻を表現するために用いる。ただし、原文のなかで既にこの「……」が使われて紛らわしい場合は、引用の省略を指示するために(中略)としてもよい。 なお、1字分だけの「…」や「・・・」(ナカグロの連打) 等で代用しない。

* 「・」や「/」や強調点の使用については、基本的に執筆者の用法に任せるが、上記の用法に照らして、校正を加えることがある。

【C】 欧文用記号

“ ” ‘ ’	欧文の論文名には、半角の“ ”を用いる。“ ”のなかにさらに引用符が使われる場合には、半角の‘ ’を用いる。
-	ハイフンは単語を結びつける場合に用いるほか、数字と数字をつなぐ際に代用する。年代(1988-2000)や頁数(305-442)など。
—	英文の文章中に割り込むかたちで注釈を入れる場合は、「—」(全角ダッシュ) で代用することができる。

- ⑥ 本文に適宜、見出し・小見出しをつける。ただし、小見出しはなくてもよい。簡単な見出しタイトルもつけ、番号だけにしない。また、「はじめに」「おわりに」は番号をつけず、次のセクションから「1」とする(「0」は用いない)。
- ⑦ 引用については、短い引用は「 」でくくって文中で示す。

- ⑧ 三行以上にまたがる長い引用は、本文との間に前後一行ずつあけ、文頭を三字下げて記す。

【例】すでに、2001年の国連人権委員会に対するクマラスワミ最終報告（E/CN.4/2001/73 January 23, 2001）においては、「法廷」のこころみが以下のように報告された（96頁）。

（一行あける）

2000年12月、女性たちのグループが『日本軍制奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷（2000年東京法廷）』と開催し、日本政府が日本の「慰安婦」制度の被害者に賠償を拒否しつづけていること、およびその実行者に対し続けている不処罰を強調した。南北朝鮮、フィリピン、インドネシア、東ティモール、中国、オランダに住む「慰安婦」に関する証拠は、詳細に収集され、今や最終的に記録として利用できるようにされた。（中略）この法廷の裁判官の判断は、日本政府の法的責任、および犯罪の実行者を処罰する手続きを設置する必要性を繰り返した。しかしながら、日本政府はこの法廷に代表を送らなかった。

（一行あける）

- ⑨ 図・表は順に番号を打ち、本文中に挿入箇所を指示する。
- ⑩ 本文中で論者に言及する場合、初出時にはフルネームで記載する。二度目からは姓だけでよい。ただし、同姓の論者が複数いる場合には、二度目以降もフルネーム表記とする。また、外国名の論者に言及する場合、カタカナ表記の後（ ）内にアルファベット表記をいれる。カタカナ表記が困難な場合、アルファベット表記のみでも可とするが、論文内の表記方法は一貫性を保持すること。

【例】 アンソニー・スミス（Anthony Smith）によれば……。

注について

- 1 注は本文中の当該箇所の右肩につけるか、右隣に半角数字で「1」とうつ。その際、（ ）でくくる等をせず、数字のみを示す。
- 2 脚注は用いない。すべて本文の末尾にまとめる。
- 3 本文末尾の注の書き方は、以下のとおり。ただし、ひとつの注が複数行にまたがる場合も改行を入れずそのまま続けて入力する。

【例】（□は全角スペースを示す 以下同様）

1□トリバラの調査は「アルジェリア系」を対象にしたもので、「モロッコ系」は含まれていない。以下、正確には……。

- 4 本文内の文献注は、全角の（ ）を用いた割注で記載する。ただし、本文末尾に文献注をまとめる場合は、参考文献の表記に準ずる。
- 5 文献注は論文末尾の参考文献と連動させる。

- 6 文献注の表記は、邦文文献の場合は、(著者名 出版年、p. x)
外国語文献の場合は、(著者名 出版年, pp. xx-xx) となる。
このとき、著者名と出版年の間、p.や pp.と数字の間、その両方に半角スペースを入れる。

【例】 (若桑 2000, p. 146) (Sedgwick 1990, pp. 47-53)

- 7 雑誌等に発表され、後年、編著作などに再録された論文等は、(著者名 [初版や初出誌の出版年] 編著作の出版年) として記載する。参考文献も同様。

【例】 (Spivak [1992]1995)

- 8 同一論者による複数の文献が同一年に発表されている場合、出版年の後に、a, b, c……と小文字のアルファベットをつけて区別する。参考文献も同様。
9 同一論者による複数の文献を本文中の文献注とする場合は、各文献の出版年の間に、半角の「,」と半角スペースを入れてつなぐ。

【例】 (江原 2001a, 2001b) (Mohanty 1985, 1991)

- 10 異なる論者による複数文献を本文中の文献注とする場合は、それぞれの間に、半角「;」と半角スペースを入れてつなぐ。

【例】 (Bhabha 1994; Said 1993; Spivak 1996)

- 11 翻訳文献について、原著(外国語)と翻訳文献(日本語)の出版年が異なるものを参照し、文中の文献注とする場合は、それぞれの出版年を記号=でつなぐ。(以下は、原著が1984年に、日本語訳が1995年に出版され、本文中に日本語訳を引用した場合。)

【例】 (キーン 1984=1995, p.52)

文献について

- 1 参考文献は論文末尾に示す。注がある場合は、参考文献は注の後につける。日本語文献は著者のアイウエオ順に、外国語文献は著者のアルファベット順に記載する。ただし、日本語文献と外国語文献の両方が含まれる場合は、まず日本語文献、次に外国語文献の順に記載する。
- 2 文献ごとに、2行目以降は全角で3スペースあける(ぶら下げ)。ひとつの書誌情報が複数行にまたがる場合も、改行等を入れず、続けて入力する。
- 3 すべての文献は、著者または編者(共著や共編者の場合は筆頭者)の姓を文頭に出して、並べる。
- 4 同一論者の複数文献を記載する場合、2作目以降の表示は著者名の代わりに「————。」4倍ダッシュ+ピリオドを用いる。このとき、出版年の早いものから順に記載する。
- 5 欧文文献の記載に関する原則は、以下のとおり。

- 【書籍】 著者名. 書名. 出版地: 出版社, 出版年.
 【書籍論文】 著者名. “論文名.” In 編著者名. ed. 書名. 出版地: 出版社, 出版年.
 【雑誌論文】 著者名. “論文名.” 雑誌名. 号数 (出版年): pp. x-xx.

【例 書籍 (単著・共著)】

Enloe, Cynthia. *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*. Berkley, Los
 □□□ Angeles and London: University of California Press, 2000.

Beck, Ulrich, Anthony Giddens and Scott Lash. *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and*
 □□□ *Aesthetics in the Modern Social Order*. Cambridge: Polity Press, 1994.

【例 書籍論文】

Soysal, Yasemin. “Changing Citizenship in Europe: Remarks on Postnational Membership and the
 □□□ National State.” In David Cesarani and Mary Fulbrook eds. *Citizenship, Nationality and*
 □□□ *Migration in Europe*. London and New York: Routledge, 1996.

【例 雑誌論文】

Appadurai, Arjun. “Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy.”
 □□□ *Public Culture*. 2. 2 (1990): pp.1-24.

6 邦文文献の記載に関する原則は、以下のとおり。

- 【書籍】 著者名『書名』出版社、出版年。
 【書籍論文】 著者名「論文名」編者名+編『書名』出版社、出版年。
 【雑誌論文】 著者名「論文名」『雑誌名』x号(出版年 * 「年」は省略) : pp. x-xx.

【例 書籍】

大江健三郎『静かな生活』講談社、1990年。

【例 書籍論文】

大沢真理「労働のジェンダー化」井上俊ほか編『岩波講座 現代社会学 11 ジェンダーの社会
 □□□ 学』岩波書店、1995年。

【例 雑誌論文】

館かおる「ジェンダー概念の検討」お茶の水女子大学ジェンダーセンター『ジェンダー研究』
 □□□ 第1号(通巻18号)(1988): pp. 81-97.

7 翻訳文献の記載に関する原則は以下のとおり。なお、論文等の規則は上記に準じる。

【訳書】 著者名『書名』訳者名＋訳、出版社、出版年。

【例 訳書】

Giddens, Anthony. *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*.

□□□ Cambridge: Polity Press, 1992. (アンソニー・ギデنز『親密性の変容』松尾精文、松川

□□□ 昭子訳、而立書房、1995年)。

*注や文献の書式については、原則として上記を参照するものとするが、執筆者の専門領域によっては、その領域で規定されている慣習に従ってもよい。ただし、いずれの場合も論文内での一貫性を保持するよう注意する。